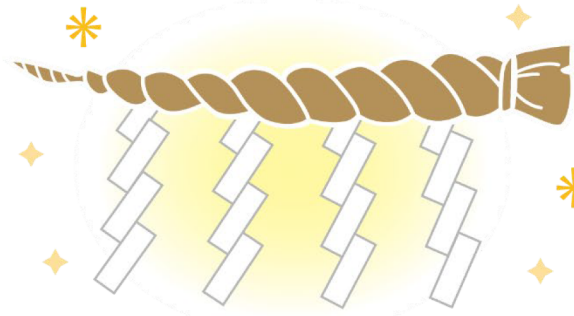
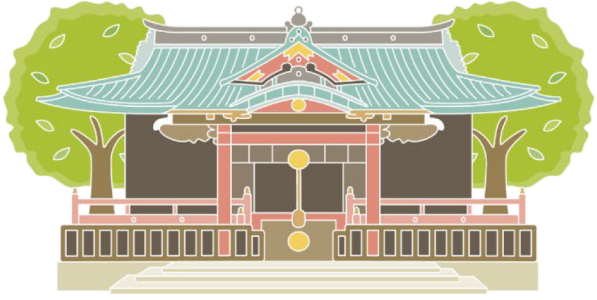
注連縄（しめなわ）と紙垂（しで）について

注連縄とは、神社の社殿や鳥居、御神木、また神域や祭場などの周囲に張り巡らす縄のことで、注連縄を張ることにより、その内が神聖・清浄な状態にあることを示しています。これに垂らしてある半紙を折ったものは「紙垂」と呼ばれ、注連縄と同様に神聖・清浄であることを示しています。注連縄は藁をなって作られていますが、一般の縄と区別するため、縄目を左ないにしているのが特徴です。また家庭の神棚にも注連縄はよく用いられますが、一方が太く、一方が細くなるよう作られており、神棚にかける際は一般的に太い方を向かって右に、細い方を左になるようにつけます。